

川べりに桜が咲いている。一昨年も去年も同じように咲いていた。きつと来年も咲くのだろう。春は出会いと別れの季節、新生活が始まる時期、期待と不安が入り混じるスタートの時。そういう風に感じなくなったのはいくつの時だったのだろうか。通勤ルートの様子も目に付くような変化は少なく、眼鏡屋の看板が塗りなおされていたり、電柱の落書きが増えていたりといった程度だ。そんな中偶然目に飛び込んできたのは手書きらしきタッチのポスターだった。

〈大人のためのピアノレッスン〉

取れなかった張り紙に書いてあるのは、音楽教室の宣伝だった。褪色したポスターの中にはピアノのイラストと散らばった音符が描かれている。見出しの下にはこう続いている。

水面

〈初心者・経験者問わず大歓迎！「昔習っていたけれどももう何年も弾いていない」という方も一から丁寧にレッスンいたします！〉

「ピアノ、か」

五歳から高校一年生まで通っていたピアノ教室のことを思い出した。普段は優しいけど練習をさぼると怖い先生、黄色い壁のレッスン室、重たい防音の扉、どこからか絶えず聞こえてくるたどたどしいブルグミュラーの練習曲、いつも誰かが弾いている『貴婦人の乗馬』。それら全て、思い出の中で埃をかぶっていた。

あの教室に通っていた頃つてもう何年前だろうか。五年、十年？ いやもっと前か。数え始めると時の流れの

速さに恐ろしくなる。とにかく十年はピアノを弾いていない、ピアノに触ってすらいらないということだ。今楽譜を見せられても読める気がしない。当時でさえ譜読みが得意な方ではなかったのに、こんなにブランクがあるのだから当然と言えば当然だが。

そのモノトーンの楽器にまつわる記憶は断片的なものになってしまったけど、忘れた方がよいことばかり覚えているので人間は不便だ。

「もしかして体験レッスン希望の方ですか？」

突然話しかけられて思わずびっくりとする。白いシャツに黒のスラックスといういでたちの男性が、チラシの束を抱えてこちらを伺っている。

「いえ、少し見てただけなんです。すみません」

ポスターと同じ内容のチラシを持っていることから、ピアノ教室の人だということがすぐ分かった。申し訳ないと思いつつもそっけなくさういいうと、男性は分かりやすく残念そうな顔をした。

「そうですか……。いつでも体験受け付けておりますので、ご興味ありましたらぜひ！こちらのチラシに電話番号も載せてますので！」

しよんぼりしていたかと思えば、威勢よく勧誘の言葉が続ける。感情が分かりやすい犬みたいな人だな、と思った。「ありがとうございます」とだけ言っただけから足早に立ち去る。とりあえず受け取ったチラシが左手の中で居心地悪そうにしていた。

「ただいま」

誰もいない部屋に私のただいまが吸い込まれる。玄関に置いたキートレーと鍵がぶつかり、カチャンと音を立てる。相手のない挨拶も金属音も、同じくらしい温度を

していた。

「はあ」

パソコンが入ったショルダーバッグを床に置き、ローソファーに腰掛ける。「体験受け付けております」という男性の言葉が頭の中で繰り返し再生された。

白と黒の鍵盤に関する思い出は全体的に臆げなものになっていくけど、薄らいでいけばいくほどいくつかの忘れられない出来事が目立っていく。久しぶりにクラシックでも聴いてみようかと思いつき、ベッドの下の収納を開けてみる。冬物の服の奥の奥、透明の衣装ケースの中には二十数枚のCDが入っている。無作為に数枚取り出し、ジャケットを眺めていると、どんな時にどんな曲を聴いていたか少し記憶が蘇ったような気がした。悲しい時にはフォーレのシシリエンヌを聴いた。落ち込んだ時は無理やり明るい曲を聴くのではなく、一緒に落ち込んでくれるような曲を聴くほうが効き目がある。

取り出したCDの中には偶然にもフォーレのピアノ作品全集があった。CDプレイヤーにセットし、何度かスキップボタンを押す。シシリエンヌはあの頃から、いやもつとずつと前から何も変わらずあるのに、あの頃と同じようには慰められた気がしないのはどうしてか。

曲を止めてCDをケースに戻す。今の私に必要なのはクラシックではなくジャズ、『シシリエンヌ』ではなく『These Foolish Things』だと感じた。こんな夜にシナトラの声は感傷的すぎる気がして、ロッド・スチュアートのほうを選んだ。もし自分が男だったら彼のような声に憧れたらどうと想像する。柔らかく掠れた声はおどけたメロディーを乗せた時に一番哀愁を纏うと思う。リピート再生に設定したその曲はいつの間にか二週目に入っていた。

人の声が入らない音楽で眠れなくなってしまうのは一体いつからだろうか。

「金井さん？」

名前を呼ばれていることに気づきハッとすると。多分返事をできたのは二度目の呼びかけだ。

「ごめんさい、少し考え事」

珍しいねといつて笑う同僚からは今日もうつすらとフローラルな香水が香った。資料に添えられた手の爪にはナチュラルなピンクベージュのジェルネイルが施されていた。

「今日よかつたら仕事終わりが飯でも行きませんか？ 明日休みですし」

「すみません、明日実は私用で朝が早くて。また今度ぜひ」

親切な誘いをやんわりと断る。それでも彼女は気を悪くした様子もなく、それじゃあまた今度行きましょうと言って自分のデスクへ戻っていった。明日は何の予定も無い。

この前ポスターを見た時から、私の頭の片隅には常にピアノのことがあった。また弾きたいのかと問われるとよく分からないが、何だか忘れられずにいた。少し他のことを考えていても、慣れた事務作業は意外と問題なくこなせて、そのことがうっすらと寂しく感じられた。出勤時刻になり、帰り支度をしていると小さく折りたたまれたピアノ教室のチラシが出て来た。この間貰った時から入れたままにしていたのだ。

その教室は会社と自宅の丁度中間くらいにあるため、わざわざ足を運ばなくても自然と前を通ることになった。教室が近づくとなぜだか緊張してきて、その通りを避け

て遠回りをして帰ろうかと思ったが、馬鹿らしくなってやめた。教室の二軒隣のコンビニの前に差し掛かったところで、ポスターの前に人影が見えた。どうやら以前私に声をかけて来た男性のようだった。薄いブルーのオックスフォードシャツを着て、ポスターの前にじっと立っている。

「あの」

遠慮がちに声をかけるとその人はぱつと振り返り、こちらを数秒見ていた。

「あ！ 以前ポスターを見てくれていた方ですよ！」

「あ！ 以前ポスターを見てくれていた方ですよ！」

「あ！ 以前ポスターを見てくれていた方ですよ！」

「あ！ 以前ポスターを見てくれていた方ですよ！」

折角の休みの日だというのに平日よりも早くに目が覚めてしまった。体験レッスンは午後からなのに、緊張して早朝に起きてしまうのはなんだか情けない。随分時間があると思っていたけれど、あつという間に午前中は終わっていた。

「ピアノのご経験はありますか？」

ポスターの前で出会った男性は佐々木さんという人で、音大を出してしばらくは他の仕事をしてきたが、最近ピアノ教室に就職したばかりだそうだ。今はまだ研修中なの

一人で生徒は取れないらしい。私はてっきりいかにも
柔和な彼がレッスンをしてくれるのかと思っていたので、
厳しいタイプの先生だったりしたらどうしようなどと少
し不安になっていた。

時計を見ると午後一時を少し回ったところだった。体
験レッスンは二時からで、教室までは徒歩十分ほどのな
でまだ早すぎる気はしたけれど、家の中にも何だか
落ち着かなかったので、小さいノートとペンをトートバ
ッグに入れ、玄関を出た。

教室の前に着くとまだ一時半だった。「山野ピアノ教室」
の看板は四月にしては強い日差しに照らされていた。こ
こは一階が事務所、二階が教室という造りになっていて、
佐々木さんを探して事務所の方を覗くと、やはり早すぎ
たのか誰もいなかった。しばらく考えて二階へと続く階
段を上る。比較的急な傾斜からあまり新しい建物ではな
いことが分かった。

階段を上った先はすぐに短い廊下に繋がっており、両
側に三つずつ、計六つの教室があった。左側の真ん中、
赤い扉の教室には「第二教室」の札がかかっている。佐々
木さんから伝えられた体験レッスンの教室はここだ。生
徒用であろう長椅子に腰掛ける。

第二教室の中からは防音扉を隔てて抑えられたピアノ
の音が聞こえてきた。ブルグミュラーの練習曲のうちの
一つ、確か『牧歌』だったはず。左手の軽快な和音が廊
下の床を跳ねていった。装飾音符の拾い方が少し拙くて
かわいらしい。練習曲の中にもつまらないものときちん
と曲らしく弾いていて楽しいものがある、この曲は
結構好きなのだ。

しばらくすると『牧歌』は止み、次の曲に移ったよう

だった。その場で譜読みをしながら弾いているようなゆ
っくりとした演奏だったので最初は分からなかったのだ
が、よく聴いてみるとどうやら「星に願いを」みたいだ。
お世辞にも上手とは言えないけれど、暖かい春の午後の

空気と相まって、心安らぐような柔らかい音だった。全
然鍵盤を叩いているような感じがしなくて、指も寝ていな
いように聞こえる。少女の小さな手が懸命に鍵盤の上を
駆け回っている様子が思い浮かんだ。

扉越しの演奏に耳を傾けていると、いつの間にか時刻
は約束の二時に迫っていた。

「金井さん、もういらつしゃってたんですね。お待ちせ
してすみません」

階段を上ってきた佐々木さんが私を見つけて声をか
ける。

「いえ、私が早く着きすぎちゃっただけなので」

緊張していることがばれたかな、と少し気恥ずかしく
なったが、佐々木さんはそんなこと特に気にしていな
いようだった。ずっと椅子の横に立たせているのも申し訳
ないので着席を促すと、失礼しますと言って私の横に腰
掛けた。

「あの、今日レッスンしてくださる先生ってどんな方な
んですか？」

「気になっていたことを思い切って尋ねてみる。」

「お伝えしてなかったですね。リョウコ先生は優しい方
なんで大丈夫ですよ。金井さんと同じ経験者の大人の生
徒さんが多くて、丁寧に指導してくださる方なので」

とてつもなく厳しい先生ではなさそうなのでとりあえ
ず安心した。今まで二人の先生に習ったことがあり、二
人とも普段は温和だったが、コンクール前になるとなか
なか迫力のある眼力で演奏をじっと見ているタイプの先

生で、私はその視線がどうも苦手だったのだ。

佐々木さんと私だけの廊下には相変わらず「星に願い
を」が流れていて、特に言葉を交わさなくとも沈黙が気
にならなかつた。

しばらく待っていると、二時を十分過ぎた頃になって
も前のレッスンは終わる気配がしなかつた。

「多分時計を見てなくて二時過ぎてるのに気づいてない
ですね……」

全然大丈夫ですよと言おうとしたときには、佐々木さ
んは既にドアノブに手をかけていた。銀色のノブを時計
回りに回して引くと、ぎぎっと重たそうな音を立てて扉
が開く。その瞬間、先ほどまで扉を隔ててこもっていた
ピアノの音が、弾けるような音色となって扉の隙間から
廊下へと転がり出してきた。「星に願いを」は佐々木さん
が入ってきたことに気づくとびたりと止まった。

「リョウコ先生、二時になったので体験レッスンの方お
願います」

自分が演奏を止めてしまったような申し訳ない気持ち
になった。

「二時過ぎてるの気づかなかつた。ごめんなさいね。遠
藤さん、じゃあ今日はここまでにします。次回までに残
りのページの譜読みを済ませておいてください。理想は
通せるようになってくることだけど、無理はしなくていい
のでね」

快活そうな女性の声が一息にそう述べた。きっとこの
人がリョウコ先生だろう。佐々木さんがこちらを振り返
ってお待たせしました、と頭を下げる。

彼が扉を開けると中から「星に願いを」を弾いていた
生徒が出てきたのだが、私はその姿を見て驚い。教室か
ら出てきたのは初老くらいの小柄な女性だったのだ。教

室内のリョウコ先生へお札を言って廊下へ出てくる。私を見つけると、こちらへ歩いてきた。

「ごめんなさいね。つい時間を忘れてしまって」「申し訳なさそうな顔でそう言う彼女は、上品なラベンダーのカーディガンに身を包んだ感じのいい女性だった。

「いえ、お気になさらないでください。素敵な演奏を聴かせていただいております」

「素敵な演奏だなんて……。止まってばかりで恥ずかしいわ。でも褒めていただいたから練習頑張れそうよ。どうもありがとう」

彼女は少し照れた様子でそう答えると、会釈をして階段を下って行った。かわいらしい音の主は可憐な少女ではなく、可憐な女性だった。

「金井さん、どうぞ」

佐々木さん入室を促され教室へ入ると、想像よりいく分か若い、私より少し年上くらいの女性がにこやかに出迎えてくれた。この人が「リョウコ先生」だろう。

「よろしく願います」

なるべく自然体を心掛けて声を出す。少しだけ語尾が震えた気がした。手短な挨拶を互いに交わすと、佐々木さんは「じゃあ」と言って一階の事務所へ戻っていった。

「それじゃあお座りになってください」

鍵盤の前に座るのはいつぶりだろうか。背もたれの付いた赤紫色の座面の椅子を座りやすい高さに調節する。よし。足の裏も浮かないし、ペダルもきちんと踏める位置だ。

「ふふ」

リョウコ先生が小さく笑った。

「とりあえず初めはお話でもしようかと思っただけけれど、早速椅子まで調整してくださったから」

ふわっと耳が熱くなるような恥ずかしさがあった。長い間触れてこなかったとはいえ、着席する前にきちんと高さを調節するという習慣は染みついたままだったようだ。「いつ頃まで、何年くらいピアノを弾かれていたんですか？」

「五歳から高校一年生まで習ってました」

「じゃあ結構長い間弾かれてたんですね。それからは何か他の楽器を？」

「高校生の頃に少しだけドラムをしました。でもそれも高校卒業するときに辞めちゃって。なので、楽器に触ること自体が十年ぶりくらいです」

言いながら自分でも、随分長く楽器から離れていたんだなと改めて思う。

「今回体験レッスンに来てくださった理由をお聞きしても大丈夫？」

その問いかけに私は言葉を詰まらせてしまった。なぜ、と問われてもその理由は自分でもよく分からなかったから。リョウコ先生は再び聞き直すことも質問を取り下げることなく、じつとこちらを見据えていた。その視線は決して威圧的なものではなかった。

「分からないんです」

ぼつり、と本心が口から零れた。

「ピアノをもう一度弾きたいとは辞めてからほとんど考えなかったし、ポスターを見ていたのも偶然目に留まったからで、体験も一度はお断りしたんですが」

一度話始めてしまえば言葉はスムーズに滑り出た。

「佐々木さんに体験どうですかって聞かれた時、気付いたら入って返事をしていたんです」

リョウコ先生は少し考えるようなそぶりをした後「なるほど」と頷き、「体験に来てくださってありがとうございます」

微笑んだ。私が述べた「理由」に対してリョウコ先生は特に何も言わなかったが、そのことは私にとって心地よかった。

「じゃあまた特に弾きたい曲とかは決まっていない感じでしょうか？」

素直にはいと答えた。ブランクがかなりあるし、折角なので基礎からきちんとやりたいという希望を伝えると、リョウコ先生は少し意外そうな顔をしたが、「頑張りましょう」と受け入れてくれた。どうやら大人になってからピアノを始める人の多くは明確に弾きたい曲があったり、基礎的な反復練習などは飛ばして、まず格好の付く曲に挑戦したがるらしい。けれどさすがに私はそんなことが無理だと分かっている。十年も触っていなければ初心者のようなものだし、ハノンから始める覚悟すらできていた。

それじゃあ早速、とリョウコ先生は黄色い横長の楽譜を取り出した。「はじめてのオルガンピアノ」、幼稚園児が使うような極めて簡単な楽譜だ。「簡単すぎると思うかもしれないけど」と先生は前置きして、まずはこれを弾いてみて金井さんも現段階を把握する、私も金井さんがどのくらい弾けるのか分ればレッスンのスケジュールが組めるから、と続けた。

正直あまりに易しすぎると思ったが、何しろ十数年ぶりだ。この位で丁度いいのかもしれないと納得した。ページ目を開くと大粒の音符が並んでいた。かなり音数は少なくシンプルなので右手の方はすらすらと読めた。

左手も三種類ほどの和音が繰り返されるだけの決して難しいものではなかったが、思った以上にへ音記号を読むのに苦戦する。「ゆっくりでもいいから少し弾いてみて」と言われ、恐る恐る鍵盤に指を乗せる。難易度が低いと

は言え、初見で演奏するのはなかなかハードルが高い。一音一音ゆっくりと音符を追う。主旋律は単音のみ、左手の伴奏もドミソ、シファソ、ドファラを繰り返すだけ。それでも途中で詰まったり、音を間違えたりしながらどうにか最後まで弾いた。「すばらしい」とリョウコ先生が手を叩く。

ミスタッチもあるし、テンポは不安定だし、躓きながらの演奏だった。でも不思議と投げ出した気持ちにはならなかった。指先にじんと熱が灯っていた。

その後もごく簡単な曲を弾いてみたり、自由に音を出したりして、体験レッスンと言いながらレッスンらしいことはしなかった。久しぶりに会う旧友と少しずつ会話しながら距離感を掴むような時間だった。そうこうしているうちにあつという間に三十分は過ぎ、私は佐々木さんに「はい」と答えた時と同じく、思わず「入会したのですが」と口に出していた。リョウコ先生は「こりとにやりの中間くらいの笑い方をして「よろしくお願います、紗綾さん」と返事をした。

山野音楽教室に通い始めて三か月が経つ。波音とブルグミュラー、それからリョウコ先生の選んだチャイコフスキーの楽譜が電子ピアノの上に並んでいる。普段大きな買い物をする時は悩みに悩んでなかなか決められない性質なのだが、今回は入会を決めてすぐにネットで電子ピアノを購入した。もう少し安価なもの迷ったが、ピアノの鍵盤の重みがより再現されているほうを思い切っ

て選んだ。練習曲の楽譜は昔同じものを使っていたが、実家からわざわざ送ってもらうのも手間だし、第一どこにしまったのかを私自身がすっかり忘れてしまっていた。ついでだからと新品を購入した。書き込みの無い真っ新

なページは、ピアノを始めた頃の気持ち思い出させてくれるかもしれないという期待もあった。

「この曲はもう完成ね」
四月の最後のレッスンで、練習のどの時よりも上手に『タランテラ』を弾けた。私の上達のスピードにリョウコ先生も少し驚いていた。いや、上達したというよりも感覚を取り戻したというほうが正確か。子供の頃退屈で大嫌いだっただハノンも、今はなぜか楽しんで弾けた。ドミファソラソファミ、レファソラシラソラ、ミソラシドシラソ。一番はあまりに繰り返すので、私というよりも手が覚えていた。

季節は巡り、リョウコ先生のレッスンを受け始めた春が再びやって来た。上達のスピードはさすがに緩やかになっているものの、少しずつ先生が用意する曲の難易度も上がってきた。先生は飽とムチの使い分けが上手な人だ。前回のレッスンよりもきちんと変化が見られれば褒めてくれるし、上達していなかったりむしろ下手になっていた（練習したのに逆に弾けなくなるということは不思議なことに時々ある）した時には必ず見抜かれた。そういう時でも決して怒るといわずに、なぜ上達しなかったのか、どうしたら上達するかを一緒に考えてくれ、より効果的な練習方法を提案してくれる。でも時々しれっと練習量を増やすような宿題を出したりするので気を抜いていては駄目だ。程よい緊張感私の練習へのやる気を一定に保ってくれた。

曲が完成すると先生は楽譜に丸を付けてくれるのだが、いつもより練習に手間取っていた曲がついに終わった。完璧な演奏とはいかないけれど、半ば暗譜して感情を

込めて弾けるようになると普段の生活ではあまり感じられない達成感があった。

「次はこの曲どうかと思うんだけど」

リョウコ先生が持ってきたのはシューマンの『メロデー』だった。新しい曲を始める時は、まず一度リョウコ先生がお手本で弾いてくれる。先生にピアノの前を譲り、曲が始まると、私ははっとした。タイトルをすっかり忘れてしまっていたけれど、八歳の時のコンクールで弾いた曲だ。蓋をしていた記憶が一度に流れ出す感覚がした。

*

「じゃあ頑張ってね」

先生と母に見送られ、控室へ向かう。ステージ裏の楽屋は出場者しか入れないから、コンクールが始まってからはずっと一人だ。幼稚園児だって大人だって、ステージの上に立つときは誰だって必ず一人きり。頼りにできるのは練習量と運だけだけれど、どちらからも裏切られる可能性は十二分にある。本番前の緊張と相まって途方もない孤独感に襲われていた。人前で演奏する直前は決まってそうだった。

ピアノコンクールの中にも色々種類があつて、レベルにも差がある。毎年夏に開催されるこのコンクールは、年齢ごとに設定された課題曲を皆が弾くというもので、出場者のレベルや入賞のハードルはどちらかというと低い部類のものだった。予選を二度通過すると、県規模の大会へ進める。その日は二度目の予選だった。

当時の私の年齢の課題曲はシューマンの『メロデー』。シンプルだが美しい曲だ。正直演奏中のことは何も覚えていない。特に大きなミスなどはしなかったはずだけれ

ど、特別うまくいったわけでもない気がする。『メロデー』ばかりを繰り返して数十人分聴くのは不思議な気分だった。

控室から列になって移動するドレス姿の少女たちがお姫様の行列みたいで素敵だと思ったことはなぜかはつきりと覚えている。それともう一つ。さつきまで忘れていたけれど、入賞者発表の瞬間が今はもう忘れられなくなっていた。発表方法は、ホールの最前列にエントリーナンバーの順に座り、自分の番号を呼ばれた合格者だけが登壇するというものだった。今思うとなかなか残酷なやり方だ。

数十人の出場者がいる中で十五番という若い番号が割り当てられた私は、演奏を終えて戻った先の控室で暇を持って余していた。そんな中で一つ前の十四番の女の子とても仲良くなつた。どちらから話しかけたのか、どんな話をしたのか、その子がどんな名前だったかは全く覚えていない。小学二年生だから他愛もない話ですぐに打ち解けられたのだろう。全員の演奏が終わるまで数十分という時間だったが、私たちは多分友達だった。

七・八歳の部が終わり、いよいよ入賞者が発表される頃になった。ここで入賞すれば本大会の地区予選へ進む。手ごたえがあつたわけではないが、望みがゼロというわけでもない出来だと自分では思っていたので、それなりに緊張していたはずだ。他の子どもたちも神妙な面持ちをして黙っており、空気はしんとしていた。

「ただ今より本選地区大会へ進んでいただく方を発表いたします」

マイク越しの平坦な声がホールに響く。
「一番、二番」

番号の割り当てはランダムだが、偶然入賞者が続くのも珍しくない。

「七番、九番」

七と九の間の空白を思い、きゅっと喉が渴いた。番号を呼ばれた子は次々にセンターの階段から、ステージ上へ上がっていく。クーラーのよく効いたホール内は真夏だけれど寒いほどだったが、この時ばかりはしわりと手に汗が滲んだ。

「十四番」

仲良くなつた女の子の番号が呼ばれ、思わず隣を見る。すると彼女も驚いたような顔でちらっと見た。きゅと呼べれると思っていなかったのだろう。

「十七番」

友達の入賞を喜んだのもつかの間、私の番号はたった数秒の間で飛ばされた。二十番、二十一番と発表のアナウンスは続くが、私には意味のない音声だった。先ほどまで汗を握っていた手の指先が、すつと冷えていくのを感じた。私は先ほどと同じ顔で彼女の方を見れるという自信を持てなかった。ただ何もない前方をじつと見つめていた。

隣で彼女が立ち上がる気配がして、私の前を通って階段へ向かう。ピンク色のドレスのチュールがキラキラと輝いていた。階段の途中で彼女はこちらへ小さく振り返る。その時の顔は幼い私の脳内に写真のように焼き付いたけれど、その表情がどんな気持ちを表しているのかが、二十年以上経った今でも分からない。申し訳く感じているような、憐れんでいるような、落胆しているような、悲しんでいるような、不満げなような。そのどれも当てはまる気がするし、どれでもないような気もする。

少女の表情が読み取れなかったのは、彼女が背負った

強すぎるステージライトのせいかもしれない。

*

「メロデー」を練習し始めてからというもの、ピアノを弾いていると、近所のピアノ教室に通っていた学生の頃を頻繁に思い返すようになった。小学校二年生のコンクールで予選落ちした後も普通にピアノを続けていた。男の子の表情の意味は別に知らなくていいし、知らない方がいいのかもしれないと思つた。ただ忘れることはなかった。

中学に進学する頃にはコンクールと名の付くものには出場しなくなっていた。「才能」とかいう言葉の意味をはつきりと分かり出したのもこの頃だった。合唱コンクールの伴奏一つとっても、隣のクラスのななちゃんの方が断然上手くて、人前でピアノを弾くのを徐々に避け出した。通っている教室の発表会だけは出ていたけれど、それはみんなが私が不真面目だということを知っていてくれたから出られたのだ。

コンクールとか学校の教室とか合唱の伴奏とか、そういう時聴衆は演奏だけを聴いている。練習期間が足りなかったとか、指が短いか、ななちゃんのお母さんはピアノの先生だけれど私のお母さんは普通の会社員だとか、そういういろいろ必要な要素は透明になって、純粹な結果だけがステージ上で裸にされる。眩しいライトの下では何も取り繕えないし、舞台上立つ演奏者には弁解する権利も時間も与えられない。

プロのピアニストならまだしも、ただの中学生にそこまで厳しい目を向ける人はいないから、気にしなくていいのかもしれない。いや気にする必要なんて今思う

とないのだ。でも、当時の私は本気でその平等さに怯えていた。

それでも教室を辞めることはないまま、私は高校生になつていった。半ば惰性といつても過言ではなかったかもしれない。小学校から幼馴染の鈴香に誘われて、アマチュアの市民 brass バンドに参加するようになったのは一年生の六月のことだっただろうか。

見学に行った高校の吹奏楽部の雰囲気は想像よりも体育会系で馴染めず、入部を諦めた。そのため消極的に帰宅部になり、特にやることのない放課後を過ごしていたのを見かねて、鈴香が強引に練習の見学へ連れて行ってくれたのだ。

初めは参加に前向きではなかったが、代表をしていた市役所で働いているおじさんに「うちのモットーは『楽しいことを、楽しいとこまで』だから」と言われて、試しに参加してみるのも悪くないと思うようになった。

おじさんの名前は竹村さんといい、ホルンとユーフォニアムとコントラバスが弾けた。高校生のところに吹奏楽部に所属していたらしい。彼がいうにはこのモットーは「楽しさ第一。練習は辛くても必要だけど、辛さが楽しさを上回るなら抜け道を考える」という意味らしい。

アマチュアといつても初心者から音楽の専門学校を出ている人まで幅広く所属していたこの brass バンドが上手くやっていたのは、この理念をみんなで共有していたからだと思う。楽器経験の浅い人がどうしても弾けないパートがあれば、竹村さんをはじめとする経験者が楽譜をアレンジしたり、他の楽器でカバーしたりして負担を減らす。楽しく曲を演奏することが目的なのだから、そういった工夫は別にズルというわけではない。何なら別にズルだっていいのだ。

メロディーを奏でるわけではない楽器に興味があった私は、ドラムを選択した。去年までそのパートを担当していた女の子は、大学進学を機に町を出たので丁度空いていたらしく、すんなりと話が決まった。鈴香は中学での吹奏楽部でもやっていたトロンボーンを吹いていた。

市民 brass バンドは基本的には週に一回の練習だったけど、有志が集まって練習日以外も合奏したりすることもあった。時たま市のイベントに出演したりすることもあって、その直前は週に二、三回集まることもあったけど、普段は自由参加という感じだった。私なんかは部活にも入っていないくて、放課後や土日も暇な日が多かったので、練習場所となっている市民会館の一室を度々訪れていた。私の住んでいた町は特に観光地もない平凡な所だったけれど、意外と公共施設が充実していて市民会館にしては珍しく防音室が設けられていた。代表の竹村さんが市役所勤めということもあり、比較的自由に防音室の一つを使うことができたので、練習場所にも困らなかつた。その部屋には古いグランドピアノも置いてあったが、弾くことはなかつた。

「二人にはー」

放課後になり、その日は鈴香が塾なので一人で市民会館へやってきた。

「おお、紗綾ちゃんいらっしやい」

バンドの皆が練習やおしゃべりを一瞬止めて歓迎してくれる。メンバーのほとんどは社会人で、高校生の私と鈴香をとても可愛がってくれた。今日は人も少ないので軽く個人練習しようとドラムの方へ向かうと、部屋の後ろにあるグランドピアノの前面に見慣れない男の姿があるのに気づいた。その子が着ていたグレーのブレザーか

ら、市内の私立高校の生徒であることが分かった。何やら竹村さんと話をしているようだった。すると竹村さんが私に気づいて、「ちょうどいいところに来た」と手招きをした。

「こちら幸田くん。今度からうちのバンドに入ることになったんだ。紗綾ちゃんと同じ高校一年生だよ」

男の子は「よろしくお願ひします」とだけ小さな声で言つて、ぺこりと頭を下げた。

「よろしく。ため口でいいよ。同い年だし」

「わかつた」

簡潔な返事が返ってくる。「数少ない高校生だから仲良くしてやってな。今度鈴香ちゃんにも紹介するよ」と言つて竹村さんは金管楽器のメンバーの輪の中へ入つていった。教室の後方には大型の楽器、ピアノやドラムセット、コントラバスなどが固まっているので、幸田くんと取り残された形になる。先ほどの返事でなんとなく分かつたが、彼はあまりお喋りなタイプではなかつた。

「金井紗綾です。改めてよろしく」

「金井さん、よろしく」

「幸田くんは何の楽器を弾くのもう決めてるの？」

「うん、僕は」

と言いながら彼はグランドピアノを指さした。

「このバンドでピアノを弾かせてもらおうと思つてる」
今までピアノ担当はいなかつたので少し驚いたが、確かに brass バンドにはピアノが入ることもあるし、特にうちなんて何でもありのバンドだからピアノが加わつても何らおかしくはない。ジャズのスタンダードナンバーをやつてみたいと言つたメンバーもいるし、そのためにはピアノは必要不可欠だろう。

「竹村さんから金井さんもピアノ経験者だって聞いたん

「だけど」

そう言われて何故かやましい気持ちになった。高校一年生の春、市民バンドに参加する少し前に私はピアノを辞めていた。「勉強が忙しい」「高校が少し遠くて通学時間がかかる」とか色々な理由を並べてまで自分から辞めたのだけれど、どの理由も正直しっくり来ていなかった。

「ちっちゃい頃に少しだけね。今は全然弾けないの」
そう答えて「今はこっち」とドラムを指さす。

「僕リズム感弱いから憧れるな。かっこいい」
率直な誉め言葉に少し恥ずかしくなったが、悪い気はしなかった。

「ピアノのほうがいいじゃん！何か聴いてみたい」
無茶ぶりだったかなと思ったが、幸田くんは「いいよ」と答え、ピアノの前に座る。わずかに椅子の高さを上げ、座り直すと、少しだけ考えるようなそぶりをして演奏を始めた。

彼が弾いた曲はドヴォルザークの「ユーモレスク」だった。決して難しい曲じゃない。上手な子なら小学生でも弾けてしまう。技巧を見せつけられるような曲じゃないけれど、そんな易しい曲でも幸田くんのピアノの腕がかなりのものであることが分かった。柔らかく丸まった手に古いピアノの重たい鍵盤を感じさせないタッチ、ペダル操作も的確で変な濁りが無い。簡単なメロディーにも抑揚が付いて、曲の展開が感じられた。音数の多さや複雑さ、スピードでごまかせないシンプルな曲は演奏者の実力を白日の下に晒す。気づくと他のバンドのメンバーもこちらに視線を送っていた。幸田くんがきりの良い所で演奏を中断すると、わっとメンバーが拍手をした。幸田くんは照れくさそうに立ち上がり、皆にお辞儀を繰

り返した。久々に聴いたピアノの音色は、自分が昔弾いていたものとは別物のように感じられた。私は幸田くんが立ち上がって空っぽになった椅子を見ていた。

幸田くんがバンドに参加してからというものの、できる曲の範囲が広がり、以前よりも活発に活動するようになった。彼はすぐにバンドに馴染んで、十月の市民文化祭での演奏も大成功だった。でも私は幸田くんのユーモレスクを聴いた日から、ドラムという楽器との距離が少しだけ離れた気がした。代わりに視界にちらちらと入るようになったピアノを、なるべく意識しないようにしていた。

とはいっても特に問題なんてなく、私たちも打ち解け、私と鈴香と幸田くんの三人で帰りに寄り道をしたりすることもあった。

「今度を通つてるピアノ教室の発表会があるんだ。よかつたら来てよ」

鈴香が「いくいく！」と即答する。彼の教室は厳しいと有名な先生のとこで、通っている生徒も軒並み高レベルだった。発表会は中規模のホールを貸し切つて行われる。折角だから、と私も行くことにして彼からチケットを受け取った。

発表会当日、鈴香とホールの近くの図書館前で待ち合わせをして、会場へ向かった。グラランドピアノのあるホールに来るの自体が久しぶりで、自分が演奏するわけでもないのに緊張していた。受付でプログラムを貰って、開演前のホールへ入る。しばらく鈴香とお喋りしながら待っていると、ジーという音が鳴って発表会が始まった。

幸田くんは第一部の三番目だったが、一番目と二番目の人たちの演奏もすぐ上手で、思わず聴き入ってしまった。モーツァルトが二人続き、ついに幸田君の番が来た。

プログラムを見て曲目は知っていたけれど、やはり始まるまで「来た」と身構える。彼はラヴェルの「水の戯れ」をそれは抒情的に、しかし確実な指運びで弾いた。私が憧れて、結局弾けるようにならないままピアノを辞めてしまった曲だ。

彼の演奏は頭から終わりまで素晴らしかったが、とびきり美しかったのは冒頭だ。一切の波紋も水音もたえずに入水するような、そんな一音目。

湖畔に佇むこの世のものとは思えないほど美しい女、いや女のかたちをした何かが、まっすぐな足をそつと月明りの下に晒す。静まり返った湖面に爪先から慎重に体を沈めていくと、彼女の肌は湖水に触れたところから透明な液体になって、自由に夜のみずうみの中を踊る。

そんな情景が浮かんだ。ただでさえ明瞭なスタインウェイの高音域が、おそろしいほどクリアに響いていた。世の中には知りたくないことと知らない方が幸せなところが大体同じくらいの数ある。退屈な練習曲と気の遠くなる反復に裏打ちされた、そんな詩情が存在するという事実は、そのどちらかに属するだろう。

閉め切られたホール内の空気は身じろぎ一つせずにお行儀よく佇んでいて、思い出したように呼吸しづらく感じた私は曲間でロビーへ出た。

「幸田くんお疲れ様〜！すごいよかったよ！」

発表会が終了し、演奏者も客もロビーに集っていた。鈴香が興奮気味に感想を述べると、幸田くんは気恥ずか

しそくに笑っていた。

「喉乾いたから自販機行ってくる」といって鈴香はホルのエントランスを出て行った。ついでに買ってくるというので、お言葉に甘えて私はレモンスカッシュを、幸田くんはお茶を頼んだ。

「あのね、私ピアノを習ってた頃ずっと『水の戯れ』弾きたかったの。でも弾けるようになる前にピアノ自体辞めちゃって。だから今日幸田くんの演奏聴きながら、感動もしたんだけどすごく羨ましいって思った」

言うつもりはなかったけど、彼の演奏を聴きながら感じていたことを打ち明けてみた。幸田くんは一瞬だけきよんとして、それから少し考えて「今からでも練習すれば弾けるようになるよ」と言った。ふふ、と思わず笑みがこぼれる。

「今からはさすがに無理だよ」

そうふざけたように笑うと、幸田くんはいたって真剣という顔で「そんなことない」と否定した。

「ほんとに？」

「ほんとに」

お互い真剣な顔をしていたけど、その状況が途端に面白く感じられて、私が笑い出すと、幸田くんもつられたように笑い出した。そこへ鈴香がペットボトルを三つ抱えて帰ってくると「何一人して笑ってるの」と不思議そうにしていた。それでも私たちの笑いは止まらなかった。

一か月後の十一月に幸田くんはプラスバンドを辞めた。

*

「えっ。幸田くんなんで辞めちゃったの？」

リョウコ先生が驚いて尋ねる。先生がなぜピアノを辞め

たのと聞くから、あれこれ遡って話をしていたらまるで私の半生を振り返ったようになってしまった。

「彼は音大目指してたんです。先生に他の楽器との合奏経験がゼロだから少し勉強してみろって言われて、うちのバンドに入ってたんですけど」

説明しているうちに当時のことを思い出して、ずきりと胸が痛んだ。初めは経験のためだけに少し参加しようと思っていたから、彼にとつては甘すぎるアマチュアバンドの甘いコンセプトも受け入れられていた。でも、次第に真剣にバンドに参加するようになって、彼にとつてもバンドは大切な存在になっていった。その結果、皮肉なことに彼は「楽しいことを、楽しいとこまで」というバンドのあり方自体に耐えられなくなってしまったのだ。

初めは竹村さん含む中核メンバーに練習方法の改善や練習量を増やすことを提案したり、彼なりにバンドのためを思ってた動いていた。確かにメンバーの上達は遅かったし、合同練習もスムーズに運ばないこともあった。

もっと練習すればもっと上手くなれるのにといい期待は、次第に焦りへと変わり、最終的にはバンドにたいする落胆となった。厳しい先生のもとで幼い頃からレッスンを受けて来た彼にとつて、私たちの姿勢は甘え以外の何物でもなく映ったのだろう。

「金井さんはその時どうしたの？」

*

「幸田くん！ 待って」

幸田くんはしばらく練習を休んでいて久しぶりに表れたと思つたら、「本日をもって辞めさせていただきます。今までありがとうございました」と簡潔に述べ、直ぐに練

習場を立ち去った。皆が面食らって固まっている中、私は思わず廊下へ飛び出し彼を止めた。

「金井さん」

「幸田くんにとってはそりゃあ私たちの言ってることは甘えかもしれないよ。逃げてるって思われるかもしれない。でも」

思わず涙がこぼれそうになった。

「音楽とか楽器を人前で弾くことが嫌になりかけてた私に、ここに入ってもらって一回楽器の楽しさを思い出せたの。それだけでもこのバンドは無意味じゃないと思う」

上手く言葉が紡げなかったけど、何とかして幸田くんにも分かってほしかった。私も幸田くんのことを理解できていないかもしれないけど、分かるうとだけしてほしかった。私たちの間の沈黙が廊下の底に沈殿して、肩で息をする音だけが空気を震わせていた。

「金井さん。今までありがとう。『水の戯れ』、弾けるようになるといいね」

幸田くんはそれだけ言って、私に背を向けて歩いて行った。廊下の先にある窓から入った西日が眩しくて、彼がどんな顔をしていたのか分からなかった。私は何も言えず立ちすくんでいた。

*

「ひどい話ですよ」

どうせ弾けるようにならない、本気で練習に打ち込まないんだから、というニュアンスが感じられた。その言葉は私に呪いをかけるのに十分だった。

「そうかしら」

リョウコ先生は眉間にしわを寄せて、難しい顔をしな

がらそう言った。

「え？」

「幸田くんは本当にあなたが『水の戯れ』を弾けるようになることを願ってくれたのかもしれないわよ」

「それにしても皮肉すぎませんか？」

今でこそ人に話せるくらいにはなったが、当時の私は彼の言葉をポジティブに受け取ることなんて到底できなかった。

「だってあなたがあなたの信念を貫いて、楽しさを優先したままで『水の戯れ』を弾けるようになったら、自分の言うことが正しかったって証明できるじゃない」

リョウコ先生は真面目な顔でそう言った。予想外の言葉に面食らった顔をしてしまう。

けれど心臓に絡まっていた糸が、するつとほどけたような感覚がした。あの時幸田くんは本当はどんな表情をしていたんだろうか。分からないけれど、微笑んでいたかもしれない。コンクールで出会った女の子の表情だった、笑顔だったかもしれない。

「私は幸田くんの『練習命』も『楽しさ第一』もどっちも間違いじゃない気がするのよね」

リョウコ先生はピアノにそっと手を当てて呟いた。時間がかかったけど、もう一度ピアノにたどり着かせてくれたのは、私に傷をつけた記憶だったのかもしれない。幸田くんの言葉を応援ととるにはもう少し時間がかかりそうだけど、挑戦状として受け取る準備はもうできているような気がした。

「先生、私弾きたい曲ができたんですけど」

眉間に寄っていたしわがぱっと消え、私の方へ向き直る。

「何の曲かしら」

『水の戯れ』です。何年かかってもいいので」